

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第23号 (2005年4月1日発行)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001938

国語研の窓

23号

平成17年4月1日 第23号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所普及広報委員会
「国語研の窓」部会

〒190-8561 東京都立川市緑町3591-2

電話 042-540-4300 FAX 042-540-4334

URL <http://www.kokken.go.jp/>



国立国語研究所の全景

もくじ

暮らしに生きることば	1
立川新庁舎御紹介	2
新庁舎竣工記念式典・祝賀会報告	3
第24回「ことば」フォーラム報告	4
刊行物紹介：新「ことば」シリーズ18	5
ことばQ&A	6
刊行物紹介：ことばビデオ	6
図書館からのお知らせ	7
華東師範大学と学術交流合意を締結	7
新刊	7
お知らせ：「ことば」フォーラム	8

暮らしに 生きる ことば

「多文化共生社会」

皆さんは、「多文化共生社会」という言葉を御存じでしょうか。この言葉が日本で使われ始めたのは1990年前後からであると考えられます。転換点になったのは平成2（1990）年の入管法（出入国管理及び難民認定法）の改正です。それ以降、例えば、三世までの日系人は日本で就労することが可能となり、これらの人々を中心に、地域に定住する外国人（登録者数）は増加し続けてきました（平成15年末時点で約191万人＝総人口の1.5％、法務省入管統計）。その結果、多様な言語・文化背景を持った人々との共存の在り方が問われ始めたというわけです。こうした中、多くの自治体では、国際化に向けた基本指針が立てられ、国際交流協会や外国人に対する日本語教室などの機関・施設が設立されました。やがて、外国籍住民が多く居住する自治体（集住地域）をはじめとして、「多文化共生社会」という言葉が徐々に使われてきました。

昨年（平成16年）、総務省は、平成17年度へ向けた重点施策の中で「多文化共生社会を目指した取組

等を推進するなど、人と自然にやさしい地域社会づくりを推進する」と述べ、「多文化共生社会」という言葉を初めて公式に用いました。また、日本経済団体連合会では、社会状況の変化（地域の国際化、労働人口の減少、地球的規模の人の流動化等）に応じた外国人受け入れ施策の一大転換（充実）へ向けて、「外国人受け入れ問題に関する提言」を行い、その中で、受け入れ後の対応施策について省庁横断的に考えるための機関として、「多文化共生庁」という新機関の設置を提言しました。

実際のところ、異なる文化やお互いの特性を共に生かしあえる柔軟な社会を築くことは決して容易なことではありません。縁あって同じ地域で生活する外国籍住民が、実は地域経済を支える原動力になっていること。また、多くの文化の共存が、新たな地域文化や豊かなまちづくりに貢献しているということ。そして、こうした状況への理解と協力の下に、安全で快適な共生社会を築くための規則や体制を共に築き上げていこうという覚悟ができた時、「多文化共生社会」という言葉は、暮らしの中に真に生かされることになるのでしょうか。

（野山 広）

立川新庁舎御紹介

国立国語研究所は、本年2月1日より立川新庁舎での事業を開始しました。JR 立川駅から北に約1.5キロ、立川基地の跡地に立つ地下1階・地上4階の新庁舎は採光性に優れた機能美あふれるデザインで、早くも3月にはファッション誌の撮影現場に選ばれるなど、注目を集めています。ここで新庁舎とそこからの眺望について写真で御紹介しましょう。



前庭から全景を望む



外観東側



中庭



講堂



庁舎4階東側からモノレールと立川市街地を望む



庁舎4階西側から富士山を望む

新庁舎竣工記念式典・祝賀会報告

旧西が丘庁舎から引っ越して約一か月が過ぎ、新庁舎での業務もすっかり軌道に乗った3月9日（水）、立川新庁舎竣工記念式典・祝賀会がとり行われました。ほんの5日前には寒波で一面銀世界となった新庁舎周辺でしたが、当日は20度近くまで気温が上がり、200名近いお客様をお迎えするのにふさわしい陽気に恵まれたのです。

まず竣工記念式典が午後2時より新庁舎2階講堂にて行われました。

甲斐睦朗所長の主催者あいさつの後、国土交通省関東地方整備局の坪田英明営繕部長による工事概要説明（代読）があり、続いて御来賓の方々からの御祝辞です。

まず河合隼雄文化庁長官が、「21世紀における国語研究の殿堂ともいうべき建物が竣工した。国語研究所は新しい時代に応じた国語施策を充実させていく上でなくてはならない機関である」との期待のお言葉を述べられました（写真）。

続いて青木久立川市長が、「立川にこの研究所が来たことを地元市長として心から喜んでいる。豊かな日本語の研究の基点となってほしい」と暖かい歓迎のお言葉を語られました。

そして前田富祺日本語学会会長からは、「研究に加えその内容を世間に知らせる広報も今後一層重要になる。将来を見通して研究を続けていけば、国語研究所の将来は洋々たるものがある」と今後の進路についてアドバイスを頂きました。

最後に、新庁舎建設に御尽力を頂いた設計・建築各社を紹介した後に、代表の方に甲斐所長より感謝状が贈呈され式典は終了しました。

式典終了後は施設見学の時間です。来訪者の方々に図書館・音声スタジオ・中央資料庫などを実際に見ていただくとともに、本紙でも度々お伝えしてきた「「外来語」言い換え提案」をはじめ、「電子政府」「日本語教育の教師研修」「日本語の現在」「e-Japan事業」（それぞれ本紙15号、17号、20号、21号に解説記事があります）「言葉に関する電話質問」「文献情報の収集・提供」などの本研究所の事業に関し、所員がパネルを使いながら御説明しました。

その後、1階ホールにて祝賀会が行われました。所長あいさつの後、結城章夫文部科学事務次官、そして本研究所評議会会長でもある吉田茂日本音楽著作権協会会長にごあいさつを頂きました。結城事務次官は「我が国唯一の現代日本語の中核的研究機関の新たな門出に当たり、一層充実した調査研究活動を展開し、国や社会の期待に積極的にこたえていくことを願っている」、吉田会長は「国語研究所は国民の言語生活や外国人に対する日本語教育の充実発展に重要な貢献をしてきたが、改革の波の中、今後一層社会や国民の役に立つ研究所であることが求められている」とそれぞれ激励のお言葉を語られました。約1時間にわたって行われた宴は午後4時を回るころにお開きとなり、移転後最初の大きな行事は滞りなく終了しました。（新野 直哉）



第24回「国立国語研究所の歩み—西が丘時代を中心に—」

第24回「ことば」フォーラムは、昨年12月18日(土)の午後2時から4時半まで、国立国語研究所の講堂で開催され、175名の参加者がありました。

今回は立川への移転を前に、研究所が約40年間お世話になった北区西が丘での最後のフォーラムとなりました。そこで、これまでの研究所の調査・研究を振り返り、それらが世の中にどのような貢献をしてきたかを説明するとともに、研究所の今後の方向性について考えてみることにしました。

フォーラムは三部から構成されています。

第一部「これまでの歩み」では、所長と研究員の二つの発表がありました。

(1) 甲斐睦朗「国語研究所の“西が丘時代”」では、“西が丘時代”の国語研究所の仕事の概要を説明しました。具体的には、研究所の仕事と言語生活の向上、言語政策、国語審議会とのかかわりなどです。

(2) 森本祥子「写真でみる国語研究所の歴史」では、半世紀にわたる研究所の歴史を、写真を用いながら説明しました。

第二部「それぞれの分野から」では、4名の研究員が発表しました。

(3) 三井はるみ「話し言葉—方言研究を中心に—」では、①「地域の中での多様性・動態をとらえる—社会調査—」、②「地域差の実相をとらえる—言語地図—」、③「話し言葉の姿をありのままにとらえる—談話資料—」などを話題として取り上げました。そのなかでも、言語地図・方言文法地図を中心に、共通語の背景（共通語と方言）、「ゆれ」の問題をくわしく説明しました。

(4) 山崎誠「用字と用語—語彙調査の果たした役割—」では、まず①「漢字について」で、「常用漢字表、JIS漢字、電子政府、人名用漢字」などをキーワードとして、国語研究所が異なる目的をもった漢字の問題に対してどのように対応してきたかを紹介しました。つぎに②「用語について」では、雑誌・新聞・教科書・テレビ放送の調査結果をふまえ、日本語の語彙の全体像の記述から何が見えてくるかを紹介しました。

(5) 金田智子「日本語教育—教師の研修を中心に—」では、①「過去30数年を振り返る」、②「学習者に何を教えるか」、③「学習者にどう教えるか」、④「教

師を育てること」を話題として取り上げました。そのなかでも、研修事業にかかわる「どのような教師をいかに育てるか」に重点を置いて発表しました。

(6) 杉戸清樹「言語生活」では、「社会言語学」の調査が世界的に活発になる時期の20年前に日本では既に「言語生活」という分野が確立しており、国語研究所がその調査・研究のセンターとなり、多くの成果を挙げてきたことを説明しました。そして、今後も「言語生活」を研究所の活動の〈大黒柱〉に据えるべきであることを提言しました。

第三部の質疑応答では会場から多くの御質問・御意見が寄せられました。そのなかでも、現在、若い人の言葉遣いが乱暴になってきているのではないかという御質問に対しては、杉戸研究員が実際の調査データを示しながら、「丁寧な場面では丁寧に、気楽な場面では丁寧ではなく」という傾向が顕著に見られており、将来的にはこの傾向が助長されていくであろうと予想しました。また、御質問の中には、国語研究所が松竹映画「砂の器」(1974年)のロケ地になった時のエピソードの紹介を求めるものもありました。これには会場から当時、方言研究室員でいらした佐藤亮一東京女子大学教授のユーモアあふれる御回答があり、会場がわきました。

最後に葦澤理事の閉会のあいさつの後、和やかな雰囲気の中で、会を終えることができました。

(伊藤 雅光)



「フォーラム」とは「広場」という意味の外来語ですが、国語研究所では参加者の方々と一緒に言葉について考えたり話し合ったりする機会を「ことばフォーラム」と名づけて、開催しています。

新「ことば」シリーズ18号 伝え合いの言葉

国立印刷局／473円(税込み)

●今号のテーマについて

毎日の生活の中で、私たちは言葉を使って、人に用件を伝えたり、人と良好な関係を作り上げたり、言葉で表現や創作を行ったりしています。相手と何かを伝え合い、通じ合うために、言葉は重要な役割を果たしています。

社会生活を送っていく上では、様々な人々とのコミュニケーションにおいて、どのように表現を工夫して伝達効果をあげるか、多様化するメディアをどう利用するかなど、一人一人が状況に応じて判断し、言葉を使っていく姿勢が必要です。

新「ことば」シリーズ18号では、「伝え合いの言葉」というテーマを取り上げ、様々な観点から解説や話題提供を行いました。

●今号の内容

座談会

「座談会」では、3人の方にお集まりいただき、「言葉で伝え合う」ということについて、お話を伺いました。

まず沖裕子さんは、談話行動が日本の諸地域によってどのように異なるかについて研究をしてこられた方、次に箕口雅博さんは臨床心理学のお立場からカウンセリングや異文化共生の支援に携わってこられた方、そして米川明彦さんは、俗語・集団語、手話、聖書という三つの柱から成る研究活動を通して、様々な角度から「通じ合うこと」を研究してこられた方です。

座談会では、口頭言語や手話、表情・身振りなど、コミュニケーション手段の様々な形について、そしてそれらを用いた表現の特徴や工夫についてのお話が出ました。また、自分が発信するだけでなく、相手の言葉を引き出し、受け止めて、よりよく分かち合うことの大切さについても話し合っていました。そして、人々が共に生きる社会の実現に必要な「伝え合う能力」とはどのようなものか、そのためにどのような「伝え合いの言葉」を育てていくべきか、提言を頂きました。

解説

「解説」では、言葉による伝え合いについて、所内外の執筆者が異なる視点から説明を行っています（以下、所外執筆者の方のみお名前を挙げました）。

解説1「言葉で人とのかかわり合う」では、言語伝

達の諸機能をもとに、言葉による人への働き掛け、人との関係作り、発達するメディアと言語伝達との関係について総論的に述べています。

解説2「〈行動に展開する表現〉におけるコミュニケーション上の工夫」は、蒲谷宏さんに執筆をお願いしました。この解説では、依頼、勧め、誘いなど、幾つかの働き掛けを取り上げて、伝達の姿勢や表現上の工夫について説明しています。

解説3「様々な関係の中でのコミュニケーション」では、所内執筆者との共著の形で、オストハイダ・テーヤさんに執筆をお願いしました。日常生活で出会う多様な関係において、どのようにコミュニケーションを行い、より良いかかわり方を見つけていくかについて解説しています。

解説4「メディアを介した「伝え合い」」では、三宅和子さんに執筆をお願いしました。最近発達してきた新しいメディアについて、そこでのコミュニケーションの特徴を紹介し、メディアの多様化の中で発信する主体としてどのようなことを考えていくべきか、解説しています。

言葉に関する問答集

このほか、言葉による伝え合いについて、日常生活で経験すると思われるトピックを17題取り上げ、質問応答方式で解説しました。

これらの記事が、人と人との伝え合い、言葉による人間関係の構築、言語コミュニケーションのより良い在り方について考えていただくきっかけとなれば幸いです。



※政府刊行物サービスセンター、官報販売所で販売。
書店でも注文できます。

(新「ことば」シリーズ部会)

ことばQ&A

質問 漢字には、辞書に載っていないものがありますが、それらはすべて間違っただけなのではないでしょうか。

回答 辞書に見つからない漢字の一つが、書いた人が正しいと思い込んでいる誤字です。「初」の衣偏を「ネ」としたり、「落」をさんずいに「落」（落）とするものは、「常用漢字表」などによる国語施策や、字源に関する説と一致せず、国語辞典の表記や漢和辞典の親字にはまず採用されません。一方、故意に書きやすく、「第」を「弟」、「曜」を「旺」、「酒」を「洒」とするような社会的な習慣として一部に行われている字体は、俗字、略字、書写体などと呼ばれますが、やはり辞書にほとんど登録されません。

そうした変形ではなく、文字そのものが実在するにもかかわらず、辞書に掲載されていないケースもあります。これは、日本製漢字（国字）に目立ち、^{くるみ}「杓」は地名に、^{さおとめ}「五月女」を合わせた「腰」も姓に伝わっています。国字は、中国に典拠がないために誤りとみなす学者もいましたが、現在では使用の蓄積により、その存在が認められるようになってきました。古文書などに書かれた^{ふぶき}「風」や、宮沢賢治の詩稿に見られる「^{鏡鏡}鏡鏡」（読みは「かがみ」と

考えられます）も、表現意図が込められた造字であり、このたぐいは過去から現在に至るまで幾つも見つけられます。漢字の用法でも、例えば、「混む」は、中国古典にも「常用漢字表」にもないため、多くの漢和辞典は「混」の字にこの訓や意味を示しません。

辞書というものは、こうあるべきという規範と、社会でこうなっているという実態とを記述する両方の役割を合わせ持っていますが、漢字に関しては後者の記述に十分でない面が見られます。漢字もそれに対する人々の意識も、時代とともに変化します。漢字にとって何が正しく、何が誤りかという基準や根拠は、国や地域、社会や個人によっても異なることがあります。音声、音韻に比べると、固定的なイメージが抱かれがちな漢字ですが、人為的な改変が加えられやすく、個々の字について何をもって正しいものとするかは、辞書によっても判断が分かれるケースがあります。実は、辞書に載っている漢字にも誤字はあり、あえて「^{かし}譌字」などと称して過去の誤字を載せることもあります。一冊の辞書ですぐに正誤の判断を下すのではなく、さらに複数の辞書に当たってみて、それらを材料として、考えてみるのが望ましい態度ではないでしょうか。

（笹原 宏之）

刊 行 物 紹 介

「ことばビデオ」シリーズ〈豊かな言語生活をめざして〉4 『暮らしの中の「あいまいな表現」』

VHS35分／対象は中学生以上、解説書付き、近日刊行

日本語の特徴としてよく指摘される「あいまいさ」を取り上げ、あいまいな表現の果たす役割、あいまいさが引き起こす問題、それを解決するための工夫について、幾つかのエピソードをもとに紹介しています。

I：「あいまいな表現」を探してみると…

II：「あいまいな表現」をめぐる三つの話

第1話：断り方に見る「あいまいな表現」—— その働きと問題点 ——

第2話：簡潔でわかりやすい表現 —— 標識や絵文字に学ぶ ——

第3話：「あいまいな表現」で問題が起こったら…

「ことばビデオ」シリーズは、各都道府県教育委員会を通じて、地域の視聴覚ライブラリー等に配布されています。

購入を御希望の方は、

東京シネ・ビデオ株式会社（〒103-0022 東京都中央区日本橋室町 1-8-8 電話 03-3242-3151 FAX 03-3242-3182
<http://www.tokyocine-video.co.jp/>）までお問い合わせください。
定価は15,750円（税込み）です。



図書館からのお知らせ

独立行政法人国立国語研究所図書館は、現代日本語についての研究文献・言語資料を中心に、日本語学、言語学、日本語教育、及び、関連分野の文献・資料を収集・所蔵しています。全国で唯一の、日本語に関する専門図書館です。

○利用案内

- ・開館日：月曜日～金曜日
(毎月最終金曜日、祝日、年末年始を除く)
- ・開館時間：9時～17時
- ・どなたでも御利用になれます。
- ・前もって、御来館日時と必要な資料名を御連絡ください。

※連絡先：

独立行政法人 国立国語研究所 図書館
〒190-8561 東京都立川市緑町3591-2
TEL：042-540-4640
FAX：042-540-4339
E-mail：tosyokan@kokken.go.jp

- ・閲覧室の本は御自由に御覧ください。書庫の本は係員がお出しします。
- ・館外貸出は実施していません。
- ・著作権法の範囲内で、資料の一部を複写できます(1枚10円、B5・A4・B4・A3)。

○所蔵資料

(平成17年3月22日現在)

図 書	和漢書	洋 書	計
	83,192冊	17,416冊	101,803冊
雑 誌	和雑誌	洋雑誌	計
	3,595種	360種	3,955種

○蔵書検索

- ・国立国語研究所のホームページから所蔵資料の検索ができます。→「研究所の紹介」→「図書館案内」→「図書館・図書資料検索」

「図書館蔵書目録データベース」
http://www.kokken.go.jp/tosyo_kensaku



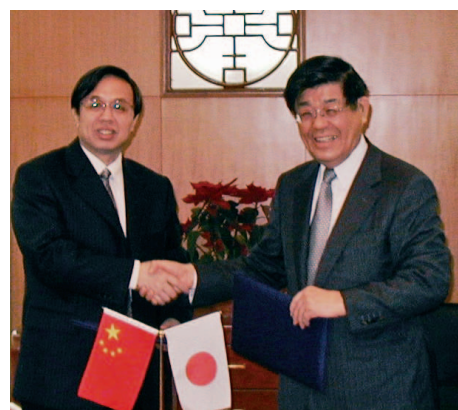
華東師範大学と学術交流合意を締結

独立行政法人国立国語研究所は平成17年1月13日、上海の華東師範大学との間で、研究・情報の交流及び事業の協力を内容とした学術交流合意締結式を行いました。平成14年10月の中国北京日本学研究所センター及び平成15年10月の韓国国立国語研究院(現在の韓国国立国語院)に続く三機関目となります。

華東師範大学は1951年創立の教育系総合大学です。

締結式終了後、両機関における日本語研究に関する状況及び課題、将来構想などの情報交換を行いました。

また、国語研究所の甲斐睦朗所長と杉戸清樹日本語教育部門長が、同大学の教官、大学院生等を対象に記念講演を行いました。



合意書を取り交わす王建磐中国華東師範大学校長(左)と甲斐所長(右)

新 刊

新「ことば」シリーズ18『伝え合いの言葉』2005年3月／国立印刷局／A5判横組み128ページ／税込み473円

第25回「ことば」フォーラムのお知らせ

はじめまして、国語研究所です。—— 調査・研究の“今”——

日時：2005年5月14日（土）

午後1時30分～3時30分（1時開場）

場所：国立国語研究所立川新庁舎2階講堂
（立川市緑町3591-2）

入場無料・参加申し込み制

国立国語研究所は、2005年2月1日に、北区から立川市へ移転しました。今回は、研究成果の一部を紹介し、今後の展望を示したいと考えます。



【プログラム】

◇所長「国立国語研究所の使命」

◇前川喜久雄『日本語話し言葉コーパス』とその応用

皆さんは、「話し言葉のデータベース」と聞いてどんなことを想像しますか。国語研究所では、自然な話し言葉を録音して集め、それに言葉の研究のための情報をつけた『日本語話し言葉コーパス』を開発しました。今回は、その特徴を紹介し、話し言葉研究の現状と将来の課題についてお話しします。

◇吉岡泰夫「自治体と住民のコミュニケーションを円滑にする工夫」

自治体と住民が協力して、行政サービスをより良くするには、お互いの「分かりやすい言葉で伝える工夫」や「円滑なコミュニケーションを図る工夫」が大切です。国語研究所では、このような言葉やコミュニケーションの工夫について、住民と自治体の双方を対象にした全国調査を実施しました。その結果を発表し、御参加の皆さんと話し合います。

【申し込み方法】

氏名・連絡先・参加希望人数を下記まで御連絡ください。

国立国語研究所「ことば」フォーラム係

電話 042-540-4622（直通） FAX 042-540-4456 E-mail: forum@kokken.go.jp

なお、当日は一般施設公開（3時30分～5時）を予定しています。

問い合わせ先：042-540-4379（総務課）

平成17年度は、他に4回の「ことば」フォーラムを予定しています。

7月30日（土） 武蔵野市国際交流協会 「国際化時代の^{ことば}言葉の教育」（仮題）

9月18日（日） 北海道大学学術交流会館・大講堂 「コミュニケーションについて考える」（仮題）

11月5日（土） 名古屋国際センターホール 「外来語を考える」（仮題）

2006年1月～3月（土） 日時未定（都内）《コミュニケーション》をテーマに。